

Umi Kikawa

歩みを重ね 世界の頂点へ

木川海

18歳以下7人制ラグビー国際大会優勝
佐沼高校3年(迫町錦東)

「自分たちのラグビーが世界に通用して、とにかくうれしかったです」と大会を振り返る。昨年12月、本市出身の木川が日本代表候補となり得る有望選手14人による「U18女子SDS ニュージーランド遠征」の一員に選ばれた。出場した7人制ラグビー国際大会「グロバルユースセブンス2024」ではキャプテンとしてチームをけん引し、優勝を果たした。木川がラグビーを始めたのは5歳の時。ラグビーコーチ

だった父の勧めでスポーツ少年団「佐沼ブラタナスジュニア」に入団した。親には「サッカーがしたい」と言ったのに、だまされたのかも」と照れ笑いするが、続けるうちに楽しさにのめり込んでいった。中学卒業とともにスポ少を退団。佐沼高校に進学し、唯一の女子部員としてラグビー部に入部。男子部員と同じメニユーをこなし、着実に成長してきた。県内の女子ラグビーチーム「DIANATE」にも

所属し、試合経験を重ねた。木川は、力強さとスピードを兼ね備えたコンタクトプレーが持ち味。2年夏の大会で、体格で上回る相手にタックルで打ち勝った経験から、さらに自信を深めた。念願かなって選抜された今大会では、海外選手を相手に戦術的なラグビーを展開。優勝に大きく貢献し、大会ドリームセブンにも選ばれた。昨年末には高校ラグビーの聖地・花園で開かれた女子東西対抗戦に

東北から唯一出場するなど、華々しい戦歴を積み上げた。佐沼高校ラグビー部の白鳥直人監督は「男子チームと共に上を目指す中で、互いに良い影響を与え合ったことも成長の要因」と話す。木川は「今後の目標は、ラグビー日本代表と、発展途上国で困っている人を助ける仕事に就くこと。支えてくれた人たちが誇りに思える姿を見たいです」と抱負を語る。夢に向かって一歩ずつ、歩みは止まらない。

夢に見た 最高の舞台へ

Taiga Kumagai

熊谷太雅

福岡ソフトバンクホークス入団
東陵高校3年(石越町第十二)

「ドラフトで指名された瞬間は驚いて頭が真っ白になりました」と歓喜の瞬間を振り返った。昨年10月24日に開催されたプロ野球ドラフト会議で、本市出身の熊谷が福岡ソフトバンクホークスが育成選手として指名。プロ野球選手としての人生をスタートさせた。熊谷が野球を始めたのは小学1年の時。兄の影響でスポーツ少年団「石越ジャガーズ」に入団した。「3年生の時に初めてピッチャーをしました」がス

トライクが入らなくて、もうやりたくないと思いましたが」と白い歯を見せる。その後、身長とともに球速も伸び、制球力も安定して投手としての才能を開花させていった。石越中卒業後「野球の強い高校で自分の力を試してみたい」と東陵高校に進学。入学後すぐにけがをして投げられなくなり、辞めたいと思ったこともあったが、父祐さんからの「限界まで頑張ってみよう」という声で再起を誓い、徹底し

て体づくりに励んだ。熊谷は185センチの長身から繰り出す角度のある直球と曲がり幅が大きいキレのあるスライダー、コーナーを投げ分ける制球力が武器。2年秋に背番号1を背負い、仙台育英学園高を相手に1失点完投勝利を収め、一躍注目を集めた。3年春の県大会でも県内屈指の強豪校である東北高戦で勝利投手に。夏の大会でも抜群の安定感を見せ、大会優秀選手と県選抜選手に選ばれた。

東陵高硬式野球部の千葉亮輔監督は「今後さらに大きく成長する可能性を秘めている選手。将来性を見込まれたと思うので、ひたむきに頑張ってもらいたい」とエールを送る。熊谷は「球速が140km/hを超えるようになってきたので、まずは支配下登録を目指し、いつかは1軍のマウンドに立つて今まで支えてくれた人たちにプレーで恩を返したいです」と、感謝の思いを胸にプロ野球界での飛躍を誓った。



© SoftBank HAWKS